

かけはし さんし Sun & Sea

2026年7月
第4号

特集

私たちはなぜ ハンセン病問題に関わるのか

紹介 教区内の国立ハンセン病療養所
ハンセン病問題にであう本・映画
人 出遇う―河野大介さん(山陽エリア)
雑誌 法語ポスター企画の裏側・教学・儀式研修部門
連載 部門員のひとりと
付録 ねえ、ジェンダーのはなしをしよう
お寺の掲示板(法語ポスター)

山陽四国教区
Online tool



WEB SITE
ウェブサイト



YouTube
YouTube



Kyomusyo
LINE
山陽四国教務所ライン



KOHO LINE
広報部ライン



お気に入り登録・友だち登録
をぜひお願いします。

Season2-Vol.2

ねえ、**ジェンダー**の
はなしをしよう Respect all genders

登場人物



…海ちゃん



…山ちゃん

< 海ちゃん・山ちゃん



お父さんが住職さんから
門徒会の役員を
お願いされたんだって。



へえ。なんか大変そう。



でもお父さんね、
「妻が最適だと思うんです。
女性ではだめなんですか？」
って、若院さんと坊守さんに
相談したの。



それで？



お二人は「是非、女性の声を
届けて欲しいです」って。
それで、お母さんは嬉しそうに
「私、やってみたいです」って。



住職さんの了解もらい、
会合とか学習会に
行くようになったよ。



へえ。それでどんな感じなの？



ほとんど男の人で、
戸惑ったみたい。



ふーん、女性が発言することで、
お寺も門徒会も変わっていく
じゃない。



そうだね。それでお寺さんも
ジェンダーカルタとか、色々
やって発信してるんだね。
今度は勇気出して発言しよう！
ってお母さんに言ってみるよ。



+ 写真 音声 Aa



法語ポスター企画の裏側
教学・儀式研修部門 後藤功



今回の法語ポスター作成にあたり、他に挙
がった案を紹介します。

▶「皆、名を称し阿弥陀仏の本願を憶念す
ることはくの如し」(教行信証行巻) ▶「本願
力にあいぬれば むなくすぐるひとぞなき」
(高僧和讃) ▶「世のなか安穩なれ、仏法ひ
ろまれ」(親鸞聖人御消息集広本)などの親
鸞聖人の言葉や、▶「わかきとき、仏法はた
しなめ」(蓮如上人御一代記聞書) ▶「くす
りあればとて、毒をこのむべからず」(歎異
抄)などの言葉が挙がりました。

他にも安田理深師や池田勇諦師などの真
宗の諸先輩の言葉や宇多田ヒカルさんや
藤井風さんといった現代に活躍されてい
る音楽家の歌詞など多種多様な言葉が挙
がりました。

人を立ち止まらせ、人に気づきを与えるも
のであればそれを法語というのだと感じた
ことでした。

部門員のひとりと

広報部門 日野 和雅



「かけはしSun・Sea」が刊行されて以来、
4回にわたり表紙絵を担当いただいたイラ
ストレーターのNOBIKOさん(@nobiko40)
についてご紹介します。NOBIKOさんとは子
ども同士が同じ幼稚園に通っていたご縁で
出会い、お子さんがお寺の日曜学校へ通っ
てくださったことで知り合いました。初めて
作品を見せていただいた際、その素敵なか
色使いと優しく暖かい絵柄に心惹かれ、お寺
のチラシヘイラストをお願いしました。
また、NOBIKOさんは、イラストの他にも自
己表現のためのワークショップ活動を通じ
て人と人をつなぐ場を生み出されています。
現在はお寺の法話会や座談会にも参加さ
れ、芸術や子育て・夫婦についてなど、多彩
で深い話題を提供してくださっています。
NOBIKOさんをはじめ、日常のご縁から深く
つながっていけることは、お寺のありがた
いところだと改めて実感しています。

私たちはなぜ

ハンセン病問題に関わるのか

山陽教区と四国教区は改編され、昨年7月より「山陽四国教区」として、新たに発足しました。両教区のあいだには瀬戸内海が広がり、その海域には国立ハンセン病療養所が三カ所あります。現在、それぞれの療養所を訪ね合いながら交流会を重ねています。そうした取り組みの中、このたび長年にわたりハンセン病療養所と関わってこられた玉光順正さんにお話をうかがいました。



話し手：玉光 順正（たまみつ じゅんしょう）さん
山陽四国教区 第7組 光明寺（兵庫県市川町）前住職
聞き手：上岸 佑介・藤谷 真（広報部門）

―玉光さんがハンセン病療養所と交流を始めた頃は、どのような感じだったのでしょうか？

私が初めて長島愛生園というハンセン病療養所を訪ねたのは、1980年代のことでした。きっかけは、兵庫県の高校教師で解放教育運動を続けてこられた福地幸造さんの言葉でした。福地さんは「遅すぎたにしろ、気がついた時点から実行上のこととして動くのが仁義だろう」と語られました。その言葉に背中を押されて、私は長島に足を運ぶようになりました。

最初は春季慰霊祭に参列するだけでしたが、やがて定期的に訪問するようになりました。そのころの慰霊祭は法話・説教に行く、所謂慰安布教といわれる「あなたがたたちが園で暮らすことが国のため、家族のためになる」そういう感じのお話でした。私はその頃、市川親鸞塾とか町内の同世代の人たちも含めていろんな活動をやっていたので、園へ行くのも一人で行くのではなくて、つまりお説教をしに行くのではなくて、こちらの感覚では、みんなが学びに行くという形で療養所へ行って

いました。そうすると、子ども連れで行くお母さん達もたくさんいましたので、園の方々も本当にびっくりされた。子どもが園に居ることはほとんどないわけですね。ところが、子どもが行ってバタバタ暴れるものですから本当にびっくりされた。そんな時代でした。

そんな中で、私が療養所で話をすることがありました。私自身は「へらい」の問題、強制隔離と差別の問題を課題にしていたので、その話をしたら「先生、らいの話はいいです。法話をしてください」と言われた。しかし、その方は、次に行ったときに、「先生、えらいことを言っていました」と言われたのです。どういうことかという、と、「へらい」のことが気にならん日は一日もないのに、お話を聞いて、つい言うてしまいました」と。私が言いたいのは、私達が慰問布教で隔離を前提としてお説教をしてきたことが、ハンセン病を患っていた人たちの中にこういう感覚を生み出したのではないかということです。「いったい何を話してきたのかな」と思いました。本当に学ばさ

れたことでした。

それからしばらくして、ある女性の方が、「なぜ、もっと早く来てくださらなかったのですか」ということを言われました。これも非常にショックでした。それは、何も私の個人的なこととしてではなくて、全国各地のハンセン病療養所へ多くの先輩や同じような時代の人たちが訪れて、お説教とか、お話をしておられたわけですから、私も、いったい何を伝えようとしてきたのか。それが、真宗大谷派が同朋会運動などということを盛んにやっておってなお、ハンセン病の療養所ではまったくそういうことが語られていなかった。そんなことを我々自身の責任として思ったことです。

―現在の交流会のスタイルができてきたのは、玉光さんたちが行き始めてからだっただけですね。入所者の人たちから教えられたことはありますか？

入所者たちとの出会いの中で学んだことは、ハンセン病の問題は患者さんだけの問題ではないということです。隔離してきたのは社会であり、私たち自身です。このことに気づかせてもらっ

たのが、長島愛生園真宗同朋会の導師であった伊奈教勝さんとの出会いです。伊奈さんは当時、園内で藤井善と名告^{なの}っておられました。

長島に橋がかかったとき、私は「このたび橋が架かっておめでとう。今までは船で来ていたけれども、今日は橋を渡ったのです。人間回復の橋、いい名前です。あなたがたの人間が回復です。しかし、人間回復ということは、あなたたちの人間を回復することはもちろんですが、そこへ閉じ込めていた、隔離した側のわれわれ人間も、同時に回復するということです。あなたがたが本当に人間回復されない以上、そこへ閉じ込めた側の人間も、実は回復されないのです」と話させてもらいました。

この言葉を聞いて、伊奈さんは、「世を捨てた私、かわりのない外、それは実はそうではなくて、私という人間がここにいるということは、私という人間だけではなくて、私に関わりのある多くの人々と関係のある私だということが、その言葉で本音として分かったのです」と、こういうふうに言われました。

このことがきっかけとなって、198

9年に本名の「伊奈教勝」を名告られました。本名を名告られるとき、伊奈さんは敵前上陸という言葉を使われました。非常に緊張しておられたことが伝わってきました。

また、伊奈さんは、「戦争で兵隊にとられお国のために国を守った。今度は「へらい」から国を守るために隔離された。二度も「国のため」ということで人生の転換を強いられた。それでも国を問うことができませんでした」とも言われていました。

―伊奈さんをはじめ多くの方がこの病氣、そして差別によって人生が大きく変わってしまったんですね。私たちがこれからハンセン病問題に学ぶことは何でしょうか？

大切なことは、「一人になる」ということです。一人になることは孤立ではなく、真に他者とながる道だと思えます。実際、ハンセン病の隔離政策に反対して孤立を恐れず立ち上がった小笠原登先生。その教えを受け継いだ大谷藤郎先生の姿勢が、やがて国の政策を変える大きな力となりました。

現在は、テレビやネットなどによって「みんなになる」、「みんなになりたい

人」がいっぱいいます。しかし、私たちは「二人になる」「一人になって、人と人がつながっていくことができる」ということだけは確かめ続けて行ってほしいと思っています。皆さんにも、本当に「二人になって、人とつながっていく」。

ひとりぼっちになるのじゃないですよ、そういう教えがある。それが親鸞聖人の「浄土の真宗」の教えだと、私は、確信というよりも、そういうこととしてこれからも学び続けたいと考えています。

最後に、藤井善（伊奈教勝）さんの言葉を紹介します。「私は死んでも安らかには眠りません。この丘の上からあなたたちを見えています」。

今、国は静かな幕引きを図ろうとしています。出会った者、かわった者の責任として、次の世代に伝えていかなければなりません。次の世代の子どもたちのためにも、歴史を繋いでいってほしいと思っています。

―たくさんのお話を聞かせていただきまして、ありがとうございます。



ハンセン病問題に『であう』本

「13 歳から考えるハンセン病問題」
かもがわ出版 /2023 年 監修：江連 恭弘，佐久間 建



記憶に新しい新型コロナ感染者に向けられたバッシング、「自粛警察」現象とハンセン病差別の共通点を入り口として、ハンセン病への偏見・差別の歴史、そしてそれに抗する運動の軌跡をやさしく解説。差別をなくすために何ができるかを考える手がかりとして、ハンセン病問題から学ぶことをすすめてくれます。

「増補 小笠原 登

ーハンセン病強制隔離に抗した生涯ー
(真宗ブックレット 14)」

東本願寺出版 /2019 年
著者：玉光順正，菱木政晴，山内小夜子



国のハンセン病強制隔離政策に抗い、患者への献身的な治療を行った医師であり、真宗大谷派の僧侶でもあった小笠原登師をご存じですか？師の生涯、医療思想を明らかにするとともに、大谷派のハンセン病問題に対する取り組みの歴史を検証する一冊です。

映画

「一人になる
医師 小笠原登とハンセン病強制隔離政策」



2021 年
監督：高橋一郎 語り：竹下景子
企画・制作：
「一人になる」制作実行委員会

大谷派僧侶らが企画・制作を行ったドキュメンタリー映画。真宗の僧侶でもあった小笠原登を生み出した「土壌」と、彼をのみ込んでいった国策、それに歩調をあわせた真宗教団。そのような時代社会にあって、「一人になる」ことに徹することができた背景や、人との出会いを描いた作品。

<自主上映開催申込受付>
「一人になる」制作実行委員
<https://www.hitorininaru.com/>



「あん」2015 年 原作：ドリアン 助川「あん」(小説)

出演：樹木希林，永瀬正敏，他
監督：河瀬直美



どら焼き屋の店長と、店の常連である女子中学生、店の求人に応募してきた老女。世代も生きてきた環境も、あまり共通点がない3人がこのどら焼き屋で出会い、互いを知っていく。私たちの日常の中に、ハンセン病問題が見えにくいながらも確かにある現実が描かれる。



邑久長島大橋
(人間回復の橋)
1988年5月9日開通

おおしませいしょうえん 大島青松園

香川県高松市庵治町 6034-1

高松港 第1浮桟橋から官有船(無料)で約 20 分
(高松港へはJR高松駅から徒歩 10 分ほど)



船便は青松園のホームページ
または四国教務支所にて
お問い合わせください。

☞官有船「まつかぜ」

船を降りて5分ほどで協和会館です。建築から60年程経った島のお寺の傷みが大きくなり、昨年ご本尊を協和会館（かつて葬儀等を行っていた施設）に遷座しました。

毎月の同朋会はその協和会館で、きれいに修復されたご本尊を前に正信偈を読み、後は持ち寄ったお菓子で茶話会です。大島青松園には現在 29 名の方が入所されておられます。

今は 3 人の方が同朋会に来られます。

元のお寺が空き家になったことは残念ですが、新しいお寺として園の施設である協和会館を提供して頂いたことは有難いことです。有難いと思うと同時に責任を感じます。



協和会館での遷座式

ご本尊の横には大きな過去帳があります。私たちにできること(すべきこと)は、報恩講や彼岸会、降誕会など年間行事とともに、島で亡くなった方々の法要を勤めていくことだとあらためて思います。そのことを通して同じ過ちをおこさないということを確認し続けることができるのではないのでしょうか。(社会問題部門 / 岡 学)

おくこうみょうえん 邑久光明園

岡山県瀬戸内市邑久町虫明 6253

車 ―― 虫明 ICより約 5 分
電車 ― JR岡山駅下車、赤穂線乗り換え邑久駅下車、
邑久駅からタクシー約 20 分
もしくは瀬戸内市営バス 愛生園行「光明園」下車

邑久光明園は、かつて大阪に有りましたハンセン病療養所の外島保養院(1909 年)が1934 年に室戸台風により壊滅してしまったため、1938 年、長島に名前を光明園と改め開園されました。

1907 年、国の間違った強制隔離政策により、ハンセン病患者の方々は療養所に強制入所させられました。

そして、治療法が確立され、隔離政策が廃止された後も社会的な差別や偏見は残り、帰る家がなくなってしまった方たちは今もなお、光明園で生活を送っています。

私たち大谷派も、教団をあげて大谷光明会を立ち上げこの隔離政策を促進し、差別偏見を行って来たという、忘れてはならない歴史があります。そして、1996 年に「ハンセン病に関わる大谷派謝罪声明」を発表し、間違った教化を謝罪しました。

その後、1997 年からは邑久光明園で交流が行われるようになりました。そしてこの交流は先人達から今も引き継がれ続いています。現在の交流会は、法話を聞きみんなで座談をし、園の方から当時のお話を聞き、一人一人がハンセン病問題を通して、差別、偏見を学び考える場となっています。最近では手芸や合唱など園の方たちと共に楽しむ交流も行っています。

まだハンセン病問題を知らない方は是非一度足を運んでいただき、足を運んだことがある方は、それをまた次の方に伝えていただくことが、私たちがハンセン病問題に関わるうえで大切なことなのではないかと思います。

(社会問題部門 / 發知 道隆)



光明園での交流会

教区内の 国立 ハンセン病 療養所

ながしまあいせいえん 長島愛生園

岡山県瀬戸内市邑久町虫明 6539

車 ―― 邑久光明園を經由して長島愛生園へ。
虫明 ICより愛生園まで 5 km. 約 10 分。
電車 ― JR 岡山駅下車、赤穂線乗り換え邑久駅下車、
邑久駅からタクシー約 30 分
もしくは瀬戸内市営バス 愛生園行「愛生園」下車

長島愛生園は1930 年日本で最初の国立ハンセン病療養所として設立されました。しかし療養所とは名ばかりで、園の中では様々な人権侵害が行われてきました。その根拠となったのが「らい予防法」という法律でした。

この法律はハンセン病に罹った人は療養所に隔離するというもので、その目的は病気の治療ではなく、患者を隔離しこの国から絶滅させるというものでした。そんな状況で愛生園の真宗同朋会が結成され、入所者の方々はそこで念仏を称え続けてこれました。真宗大谷派は療養所の中で「慰問布教」という隔離政策を肯定する教を説いてきました。

1996 年国は「らい予防法」の過ちを認め法律を廃止。同時に大谷派もこれまでの関わり方を謝罪し、新たなハンセン病問題への取り組みを歩み始めました。

旧山陽教区では1980 年代から愛生園の同朋会と交流を続けてきました。その中のことです、ある参加者が「らい予防法がなくなってなにがどう変わりましたか」という質問をされました。それに対して入所者の方々は「どうして私たちが変わらなければならないのですか、変わらなければならないのはあなたたちでしょう」と答えられました。このことにきちんと応え続けるべく、これからも交流を続けていきたいと思っています。

愛生園はお寺での交流会もそうですが資料館やフィールドワークも充実しており、子どもたちが訪問しハンセン病問題を学ぶことも可能です。是非交流会にご参加ください。(社会問題部門 / 中杉 隆法)



子ども交流会

出遇う

つながるひろがる教区人

VOL.3

こうのだいすけ

インタビュー／広島県 備後組 光圓寺 河野大介さん

光圓寺住職。2014年に得度、2019年4月大阪真宗学院卒業後に入寺。ミュージシャンとしても活動する一方、お寺を会処として世代をこえて人々が集い語り合える場づくりに取り組む。

第三回はミュージシャンとしても活動をされている広島県の光圓寺・住職、河野大介さんです。河野さんを訪ねにお寺へ伺うと、ちょうど前坊守さんご門徒さんたちが野菜作りに勤しんでおられるところで、まずはそのことからお話を聞かせていただきました。

―お寺の前の畑で野菜作りをされていたが…

あれは、野良部です。みんなが野菜作りを楽しむ部活動なんですけど、ほかにもいろいろな部があつて、焚火部とかミュージカルダンス部、合奏部、他にはレコード部とか。これらは定期開催で、映画の上映会とか不定期開催のものもありますけど、どれも基本は誰でも気軽に、自由に来られる場所にしたいという思いでやっています。

昔のお寺って、今よりずっと開かれていたと思うんです。寺子屋みたいな役割もあったし、地域の人が集まる場所でもあつた。用事があってもなくても、ふらっと立ち寄れる居場所を作りたいな、という感じです。

―かなり幅広いですね。どの活動もそれぞれ魅力的ですが、特に「推し」というものを挙げるのであれば？

制作…自分で仕事を選んだわけではなく、そのときそのとき出会った人とのつながり・ご縁で。出会いと言えば聞こえはいいですけど、ほんと根無し草みたいなもんです(笑)

―そこからお寺に入られたきっかけは？

きっかけは、結婚式なんです。連れ合いはこの長女で、音楽活動を通じて知り合いました。前住職に「お坊さんだったら、本堂で結婚式できるよ」って。それで得度する流れに(笑)。得度はしたものの、そのときはこの先、住職になるとか、お寺で生活していくとかは考えていませんでした。お寺と神社の違いも分からない、仏教のことも何も知らない、そんな私でしたが、大阪の真宗学院のことを教えてもらって、そこから学んでいくことになりました。

その真宗学院での学びの中で、「答えはない。問いしかない」って言われたんですね。

いや、本当に衝撃でした。それまでずっと自分の知識、経験、技術を使って答えを導く「どうやって正解を出すか」という生き方をしてきたので、これまでの自分の

「親も子もそれぞれ自由に過ごせる場所」がコンセプトの「お寺であそぼ×トーキョーコービー」^{*1}ですかね。コロナ禍がきっかけとなった活動ですけど、学校行事もなくなって、遊び場もなくなって。子どもたちの居場所が、どんどんなくなっていく。それを見



行動原理が消えるというか、全否定された感じを受けて、それはもうびっくりしました。

―それまでの人生とは、真逆の言葉ですね。

そうなんです。ただ、腹が立つたけれど一回受け止めてみよう。最初は全然わからなかったし、また、いちいち突っかかってました(笑)。でも2年目くらいから少しずつ聞き方、聞こえ方が変わっていききました。今思えば、どこかで自分の都合の良いように、またそうなるようなものを求めて仏法を聞いていたんですが、そうじゃなかった。在り方そのものを問われているというか、わかるかどうかじゃない世界。時間がかかって大変ですけど、もっと聞いていかないとあかなくなって思わせてもらえましたし、面白かったですね、学院での生活は。

―そのような学びを経て、今、お寺で色々と活動されていますが、これからやっていきたいこととかありますか？

これからですか…わかりません(笑) 僕自身、計画性をもって生きて

ていて、正直、腹が立つたんです。「なんで、こんなに子どもばかり我慢せなあかんのや」って。だったら、お寺でやればいいのかって思った。すごくシンプルな話です。遊ぶ場と一緒にごはんも用意して、誰もが思い思いに楽しく過ごしています。いわゆる「子ども食堂」というのではなく、誰でも来て自由に遊べる場所があつて、そこにご飯もあるという感じですね。特別なことじゃなくて、自然なこととして。

あと、「子ども会議」というのもあります。「お寺であそぼ」は本堂以外を開放してやってますが「子ども会議」は本堂でやって、このときだけは私は衣を着ます。好きなことを自由にホワイトボードに書き出して、みんなでわちゃわちゃ意見交換するんです。餅つきをしたい、ハロウィンパーティーをやりたい、廊下を走る子がいて危ないとか。最終的に意見をまとめるとか、そんなのはいません。

誰の意見が正しい・悪いそんなのじゃなくて、一緒に遊んでいた子が実はこんなことあんなことを考えてたんやなあで終わり。そのあ

きたというより、そのときそのとき出会った人と「これ面白そう」「それやりたい」って自分が感じたことを全力でやってきたら、今になっていたという感じなので。出会いによって導かれてきましたって言えば聞こえはいいんでしょうけど、要は行き当たりばったりです。

ただ、仏法という教えに触れていく会というものが今はないので、それですかね。永代経や報恩講といった法要・法座とは別のね。「御院さん、ちよつと聞いて」といった感じで短い時間でもまずはじっくり話を聞いて、対話していく座談のような形で仏法に触れる場を開きたいです。焚火のついでとかじゃなくて、それ自体としてやりたいですね。

どこかでお寺らしいこと、住職らしいことをなんて思っている自分に腹が立つんですけど。住職になつたからといって、住職になれるわけではないのね。

誰かに認められるためではなくて、僕自身がこのお寺で仏教に出遇ってしまったように、このお寺に来る人が、人だけでなく仏教にも触れるきっかけとなる場を作っていきたいなと思っています。

聞き手／広報部門 藤谷・上岸

と、正信偈をお勤めしますけど、ほとんど帰っちゃいます(笑)

^{*1}「トーキョーコービー」は、「登校拒否のアナグラム(文字を入れ替えてつくる言葉遊び)」。全国で学校に行かないことを選択する約30万人の子どもたちのアクションを受けて、「不登校は子どもの問題ではなく大人の課題」という視点から教育を考え、学ぶ。そして子育てや教育、ひいては本当に豊かな社会について大人が考え、対話を生むためのムーブメント。

―そもそも河野さんって、もともとのお寺の生まれではないんですよね？

そうなんです。全然違います。尼崎市出身で、父親はサラリーマン。大学は工学部、機械工学科を出まして、エンジンメーカー(ヤンマーディーゼル)の開発部門に就職して、その後色んな仕事をやってきました。

ミュージシャン、音楽は本職といいますが、ずっとやってるんですが、リサイクルショップの店長をしたり、道路工事をしたり、医療機器の開発、オーディオアンプの設計販売、畳屋、ゲーム音楽の





山陽四国教区

心^{こころ}得^えたと思うは、
心得ぬなり。
心得ぬと思うは、
こころえたるなり。



「^{れん}蓮^{によしようにん}如上^ご上人^{いち}御^{だい}一代^き記聞^{きき}書^{がき}」

出典『真宗聖典』（初版894頁／第二版1068頁）

— 山陽四国教区 教学・儀式研修部門 —

真宗大谷派 山陽四国教区



follow us /



お寺の掲示板